Subaru
昴 男声合唱団　ニュース №287　'11．02．18

# １２００人の満席「怒りの」集会でした

**・・・2月17日（木）・・・**

□２月１７日（木）は、「この怒りひびけとどろけ・高齢者怒りの近畿決起集会」が「中之島中央公会堂」で開催され、全日本年金者組合近畿ブロックの、京都、兵庫、和歌山、奈良、滋賀、大阪から集結した「怒りの高齢者」１２００名が公会堂大集会室を満席で埋め尽くし、各府県本部からの「訴えと決意表明」などの後、「中之島宣言」と「年金引き下げ阻止、国庫負担分３．３万円の緊急措置、最低保障年金の創設などを求める決議」を満場一致で採択し、そのあと、御堂筋を梅田までパレードし街頭訴えをしました。

□男声合唱団「昴」はこの集会の冒頭に出演し、本並先生の指揮、静さんのピアノ、立川さんの司会で、「埴生の宿」、「しあわせは空の上に」、「なぜ」、「ねがい」と「Ｓｉｘ Ｐｅｎｃｅ」を熱唱し、会場を盛り上げました。音響効果がもう一つのステージにもかかわらず、しっかり歌えたのではないでしょうか。団員参加は３２名でした。

□公演のあと、奥村さんの歌唱指導と岩本さんのアコーディオンで「老も若きも」の歌を「六十、七十まだ若い　八十、九十はなざかり」と、会場全体で歌いあげました。ステージ応援は岡邑さんと清水さん。

# 西島さんの写真遊び

「この怒りひびけとどろけ歌ハモれ」

1918 年創建のままの気品ある姿をとどめる大集会室（中央公会堂は重要文化財）を２階席から望む。（昴はリハーサル前の体操中）

「怒り」の満席です。

日本のうたごえ全国総会（千葉）に参加して

男声合唱団昴　立川孝信

２月１１日房総半島の南、花咲き誇る温暖の地と言われる館山へ向かっているのに、まるで北国へ向かっているかのような吹雪であった。しかし、バスで隣り合わせた方がうたごえ新聞を読み出したので声をかけると長野の方でしかも娘（田楽座）と知り合いということで大いに話が盛り上がった。

さて、総会は「今、生きる人々へ共感と希望の歌を」という呼びかけで始まり、３３県４産別１８６人の参加があった。方針提案の後は例年のごとく全国の仲間の発言が４０件プラス１０（文書）件あってどの発言内容も自主的で活動的で創造的なものばかりで本当に圧倒された。その第一はやはり祭典を成功させた長崎の発言で、加盟サークル６団体８６名で取り組み、不安だらけだったが身の丈のつもりがどんどん膨らんだとのこと。全員参加で多くの団体へ呼びかけ、１万１千人参加で被爆６５周年に相応しい祭典となり大成功し、大きな黒字まで出したとのこと。地方祭典はどこにでも出来るという確信を得たとの力強い発言だった。他にもニューヨークのＮＰＴ参加、インド・韓国・中国との国際交流、大阪からダイキン争議支援のうたごえや多くの団体がコンサートや歌う会を旺盛に取り組んでいること、うた新を意識的に拡大してることなどが嬉々として次々に発言が続いた。

高遠菜穂子さんの記念講演は「いのちに国境はない――イラク戦争は何だったのか」というテーマで話され、未亡人１００万人、孤児４５０万人、砂漠生活者２００万人、心疾患の子供３万人という気の遠くなるような戦争被害の数が報告され、石油が目的のために行ったアメリカが化学兵器を大量に使って殺戮を行ったり、６本指の奇形の子供や無残な死体の映像を見せられ、激しい怒りを覚えた。また、日本の自衛隊がアメリカの言いなりの軍事行動に対してイラク人から「戦争放棄している国なのにサポートは良いのか」と言われていることに、今更ながら世界中へ憲法９条を広げたい想いを強くした。

３日目の朝は東京湾の向こうに富士山がはっきりと見える快晴だった。総会終了の後は日うた千葉祭典実行委員会に参加した。「一人の百歩より百人の一歩」を合言葉に老いも若きも団結して取り組んでおられた。企画のセールスポイントは「グレートジャーニー」で合唱連盟へも呼びかけているとのことであった。

さあ、今年の日うたは千葉アリーナ！そしてその後はディズニーで童心に返るか。南へ足を伸ばして花めぐりでもしようか。

日うた総会「懇親会」風景

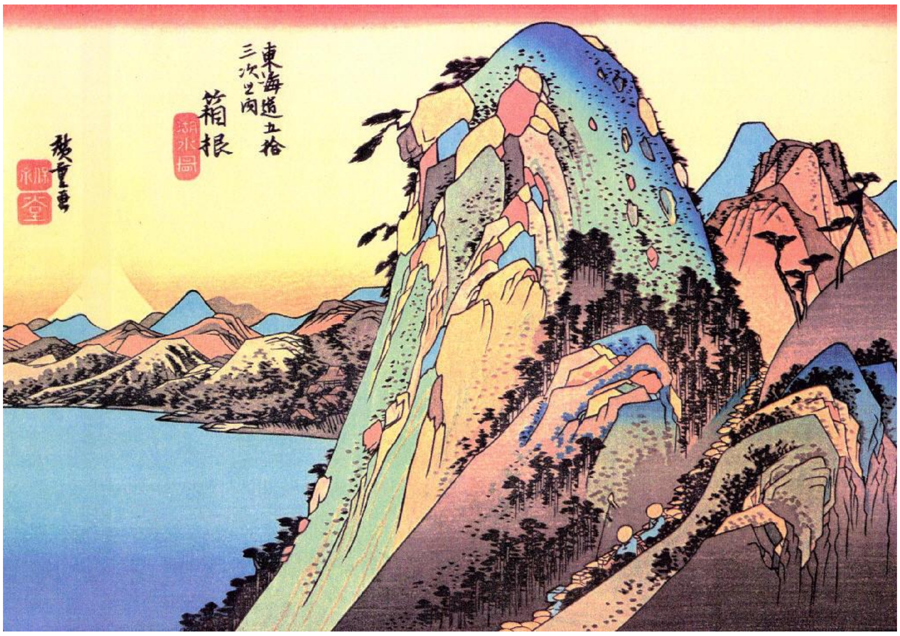
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

資料：若園さん提供

『箱根八里』

「箱根八里」は登場してすぐに人気を呼び、今日まで広く親しまれてきた。１９０１年（明治３４年）東京芸大の前身の東京音楽学校で披露された中学唱歌演奏会で「箱根八里」他１曲が「取り分け非常の喝采なりし」と報道されている。

「箱根八里」は、音楽学校教授の鳥居忱（まこと）が、課題として提出した詞に滝廉太郎が曲をつけた。同校本科を卒業した滝廉太郎はピアノ、作曲を研究しながら、嘱託で授業の補助をしていた。「中学唱歌」として歌詞を公表して作曲を募集したものに廉太郎が応募した「箱根八里」、「豊太閤」と「荒城の月」の３曲はすべて当選し、廉太郎はかなりの賞金を手にした。




漢文調で長大、何とも曲をつけにくい詞に、先輩作曲家たちがしり込みした中で、若い廉太郎がつけた曲はあまりにも見事だった。当時としては斬新な３連符を使った、勇壮、軽快な曲調が人々の人気を呼んだが、「箱根八里」ができたあと、ずっと真似する人がでなかった。一つだけ飛び抜けた時代の先駆け、先覚者であったことが知られる。

「箱根八里」が大評判を呼んでいたころ、廉太郎は留学先のドイツに到着していた。日本音楽界の大きな期待を背負っての洋行であったが、胸の病にかかり、その後２年とたたずに夭折してしまったことは、まことに残念なことであったと惜しまれる。

出典：「愛唱歌ものがたり」　読売新聞文化部編　岩波書店